# 徳次郎石蔵の起源と建築様式の変遷

池田　貞夫（宇都宮市文化財調査員）

## １．はじめに

富屋地区において、徳次郎石を利用した石仏や石塔、供養塔、石祠、石灯籠など、民間信仰に基づく石造物の建造は、概ね江戸時代初期頃から始まっている。年代が確認できる最も古い石造物は、下町薬師堂にある五智如来石塔で、寛文４年（1664）の年号がある。

一方、板倉に石が使われるようになるのは江戸時代後期からであり、石蔵で最も古い年号をもつ蔵は、寛政３年（1793）である。その後、嘉永年間（２年・３年・７年）に入ってから石蔵の建築が増え、明治期・大正時代に頂点に達し、昭和期（戦前・戦後）まで続いた。徳次郎石を利用した石蔵建築の目的は、いうまでもなく大切な家財や穀物を火災から守るためであったが、当地区においておびただしい数の石蔵が造られた背景には、地元から容易に石材が入手でき、また石を採石、加工、構築できる多くの石工職人がいたからにほかならない。

こうした中、徳次郎石蔵の建築はいつ頃から始まったのか、石蔵の建築様式はどのように変化してきたのか、また変化をもたらしたものは何だったのかを考えてみたい。

## ２．徳次郎石を板倉の屋根に利用

江戸時代後期の農家（上層農家）は、木造の母屋に茅葺き屋根が一般的であり、屋敷周りには茅葺きの納屋に加え、倉庫として板倉を構えている家も多かった。板倉は木造の骨格に、外壁は板張り、屋根は杉皮などを使用していた。徳次郎石の採石が盛んになると、災害から大切な財産や食物を収納、貯蔵するための倉庫に、石が使われるようになった。私たちが目にする現在の石蔵は、屋根と外壁全てを覆い尽くすものであるが、おそらく当初は板倉に石屋根を載せた形態が出現したものと思われる。つまり、従来の杉皮葺きに比べ、石瓦に加工した屋根を載せることによって、倉庫としての耐水性、耐火性、耐久性が格段に高まると期待できたからである。

写真１．徳次郎石の石屋根を載せた板倉

杉皮葺きの板倉は今では見られないが、石屋根を載せた板倉の形態は、富屋地区内に数棟残っている。

## ３．張り石蔵（外部補強型）の出現

江戸時代後期、石屋根を載せた板倉の形態は、その後更なる災害対策、特に防火の面から、外壁にも石を施すようになったと考えられる。いわゆる「張り石蔵」の出現である。張り石によって屋根とともに外壁を覆うことができれば、火災には万全である。かつて火災が頻繁に発生し、人々の生活の脅威となって時代に、防火対策を施した建築物の誕生は、画期的なことであったと推測される。徳次郎町西根地区では、江戸時代末期頃、既に防火対策として石蔵の建築が始まっているが、明治時代初期に付近一帯が大火に見舞われたことが契機となり、石造建築物が一挙に増えた経緯がある。またその背景には、近くに採石場があり、地元で働く多くの石工がいたこと、そして農業生産活動が盛んになったことも、大きな要因になっている。なお、当西根地区は明治33年（1900）以来、100年以上無火災記録を続けている。

さて当初の張り石蔵は、薄く板状に加工した徳次郎石を用いて、縦と横に上下交互に張り付けたり、横板を下から順に張り付ける構法であったと考えられる。現存する石蔵の中で最も古いのは、田中・池田学家の寛政３年（1791）であるが、この蔵は明治42年（1909）に改築されており、外壁の石はその時施工された可能性が高い。次に古いのが門前・大房寿男家の石蔵で、嘉永２年（1849）の年号がある。この蔵は創建当時の様相を留めていおり、富屋地区内で確認できた最も古い石蔵である。続いて上横倉・半田文世家の石蔵が嘉永３年（1950）、下金井・岡村悦男家が嘉永７年（1854）、西根・池田保夫家が万延元年（1861）、上金井・柿沼悦子家が文久元

年（1861）、上金井・福田正雄家が文久２年（1862）、上金井・池田勝浩家が文久３年（1863）などとなっている。このほか、上町・相場大吉家の石蔵が文久３（1863）年であるが、この蔵は長らく板倉として使われ、外壁に石を施したのは昭和期（戦後）に入ってからである。江戸時代後期、こうした石蔵を建築できた家は、財力に富む名主や本家筋の豪農たちであった。

明治時代に入ってからもこうした張り石蔵は次々に建築され、明治20年代ごろまでピークが続く。当時の代表的な石蔵としては、田中・城野治家（明治２年）の蔵を始め、福田龍雄家（同３年）、田中・池田茂作家（同４年）、西根・旧池田金弘家（同９年）、下町・駒場太家（同12年）、中町・高橋治家（同15年）のもの見られる。

明治時代初期の張り石蔵の構法は、縦・横板張りと横板張りが見られるが、その特徴としては①石の素材や色彩、品質が多彩であること、②石の寸法が縦１尺、横３尺、厚さ２寸を基準とするものの、実際の寸法はアバウトであること、③張り石を固定する手法として、石と石の間の溝に和釘を打ち込み、これが外部からよく見えることなどが上げられる。和釘は石を固定するためのものであるが、石蔵によっては和釘を打ち込んだ溝を埋め、漆喰を施している蔵もある。

屋根は当然のことなら徳次郎石を使った石屋根であり、入口に当たる庇の屋根にも石が使われたが、現在では瓦葺きになった蔵が多い。窓に注目して見ると、その多くは二階部分の前面又は側面に石の枠で囲った小窓を設けている。しかし中には、窓の上に庇を付け、開き戸、引き戸を設けるなど、本格的な窓を取り付けているものもある。特に明治10年前後に建築された蔵の中には、すでに出窓の周辺に「高砂」や「松竹梅」「鶴亀」の意匠を取り入れた彫刻を施している蔵も見受けられる。このことは当時の人々が石蔵に対し、実用面だけでなく、美術的側面をかなり重視していた表れといえよう。

写真２．張り石蔵（外部補強型）

写真３．張り石蔵（内部補強型）

## ４．張り石蔵（内部補強型）への変化

明治時代後期には、中間層の農家や商家にも石蔵が取り入れられ、徳次郎石を利用した石蔵の建築が進んだ。しかもこの時代は、同じ張り石蔵ながら新たな構法の石蔵が登場している。すなわち、外壁に用いる石を整形化し、石を横一直線に据え、これを積み上げた形にして、外見上積み石のように見せているのである。しかも張り石を固定している和釘は、外部から見えないよう工夫されている。この時代の石蔵は、徳次郎石特有の木目の細やかさや柔らかさがにじみ出ており、建築物として高級感や風格が感じられる。

構法の特徴としては、①石の色彩や品質が均一であること、②石をきれいに整形、加工（表面を研磨）していること、③張り石の基準となる寸法（縦１尺、横３尺、厚さ２寸）が守られていること、④張り石を固定するために和釘が内側に施され、その釘によって石と石が連結していること、⑤石と石の隙間がなく密着していることなどが上げられる。したがって、外部から張り石構法か、積み石構法かを見分けることは極めて難しく、その判断は石蔵内部の調査が必要となる。

屋根は前時代同様、徳次郎石を使った石屋根を取り付け、入口に当たる庇にも石屋根が用いられた。窓については、二階部分の前面又は側面に施され、和風様式が主流であった。すなわち窓の上に木造建築風の庇を設け、窓の周囲には渦巻き模様などの彫刻を施し、戸は引き戸としている。窓周辺の彫刻については、前時代を受け継ぎ、「高砂」「松竹梅」「鶴亀」などの吉祥、長寿の図柄が見られる一方で、彫刻の技法としては彫りが深くなり、朱や群青色に着色した彫刻も見られる。このことは石材の整形化に加え、窓の装飾化が一層進展していることを示している。

## ５．積み石蔵の普及

大正時代に入ると、木製の骨組みを建てずに、一定の大きさに加工した石をそのまま積み上げる構法が導入された。いわゆる積み石構法である。石積み構法による積み石蔵は、張り石蔵に比べると、防火・防水の面で格段に優れた石蔵であった。当時の積み石の標準的な寸法は、縦１尺、横３尺に対し、厚さ７寸で、前時代に比べ、石の厚さが３～４倍となった。こうした厚みのある重い石が使用可能になったのは、採石・加工した後に、現場まで容易に運搬できる馬車輸送の発達や道路の整備、そして石材が安価に手に入るようになったためと考えられる。ちなみに明治後期に運行を開始し、中徳次郎・宇都宮清住町間を往復した乗合馬車は、大正時代には重要な交通手段となっており、馬車の普及は目まぐるしかった。

なお大正時代、積み石構法が導入される一方で、石蔵の１階部分は積み石、２階部分は張り石構法とする蔵も見られ、また同時代、引き続き張り石蔵（内部補強型）を建築している家もある。

積み石蔵の構法の特徴としては、①石の色彩や品質が均一であること、②石をきれいに整形、加工（表面を研磨又はこぶ出し）していること、③張り石の基準となる寸法（縦１尺、横３尺、厚さ７寸）どおりの石を使用していること、④石を横積みし、上下に互い違いに積み上げ、四つ角はＬ字型に加工した石を積み上げ、堅固にしていること。⑤石と石の間を完全に密着させてコーティングし、防火・防水対策を万全にしていることなどが上げられる。

屋根は前時代と同様、徳次郎石を使った石屋根であり、入口に当たる庇の屋根にも石が使われた。窓については、二階部分の前面又は側面に和風の出窓が取り付けられている。窓の上に庇を付け、窓の周囲に渦巻き模様などの彫刻を施し、戸を引き戸としている点は、前時代同様である。

石蔵の大きさは、一般に間口３間×奥行２間を基準とするが、この時代には、間口５間余×奥行３間の大きさをもつ大きな石蔵が現れている。また、農業協同組合によって、穀物を貯蔵する大きな倉庫が同時代に建設されている。

写真４．徳次郎石積み石蔵（大正末期）

写真５．徳次郎石積み石蔵（昭和戦後）

## ６．徳次郎石蔵と大谷石蔵が建ち並ぶ

大正時代の末期から昭和時代の戦前には、徳次郎石に加え大谷石及びその他の石材を使った石蔵が建築されるようになった。前時代までは、圧倒的に徳次郎石が用いられていたが、この時代は概ね徳次郎石蔵が５割、大谷石蔵及びその他の石蔵が５割の比率であった。また、明治時代から大正時代中期に建築された数に比べると、当該時代の建築棟数は著しく減少している。これは当該時代が、昭和恐慌や相次ぐ戦争によって経済状況が悪化しており、一部の限られた家のみで石蔵の建築が行われた。

当該時代の石蔵の構法としては、徳次郎石、大谷石を問わず積み石であるが、その特徴としては①石の色彩や品質が均一であること、②石をきれいに整形、加工（表面を研磨又はこぶ出し）していること、③積み石の基準となる寸法（縦１尺、横３尺、厚さ７寸）どおりの石を使用していることなどは、前時代と同様である。異なる点としては、四つ角にＬ字型に加工した石を使わず、単体の石を交互に外向きに出し、

写真６．大谷石積み石蔵（大正末期）

積み上げている点である。

一方、二階の窓については、従来の和風の窓に加え、洋風の窓を取り入れた蔵も見える。洋風の窓は一般に庇をアーチ型とし、左右の柱をオーダー柱としている。またこの時代に普及した大谷石蔵においても、窓や正面入り口の梁、柱は徳次郎石を使用している点が注目される。つまり装飾部位の窓などは、依然として徳次郎石特有の木目の細やかさや美しさ、細工のしやすさが好まれたのである。

同時代に発達した石積みの構法は、その後、昭和時代の戦後まで続いたが、昭和31年９月２日以降は、建築基準法施行令第56条に基づき、石積みに加え、柱や梁などに鉄筋コンクリートを用いることが義務づけられた。

## ７．大谷石蔵が主流に

昭和時代の戦後になると、農地改革によって自ら農地を所有する農業者が増え、また経済の発展に伴って穀物用倉庫・家財用収蔵庫の需要が高まり、急速な勢いで軒並石蔵が建築された。昭和20年代～50年代までの40年間の建築総数は、富屋地区内で60棟余にのぼる。しかもその主流の石材は、大谷石である。徳次郎石の石蔵もわずかながら建築されたが、比率でいえば１割程である。大谷石は昭和30年代以降、採石が機械化され、トラックによる輸送手段が発達して、大量生産が可能となり、石材が安価に容易に手に入るようになった。これに比較して徳次郎石は、採石場が標高300mの尾根沿いにあり、ふもとまで運搬するには多くの労力と経費を有すると同時に、明治時代以来、採石場は共有地が多く、基本的に個人個人が採石・加工に従事してきた。ただし、一時（昭和39年～49年)、この地で日光石材株式会社が「日光石」のブランドで、採石、加工、販売した歴史がある。

徳次郎石を用いた戦後の石蔵の事例を見ると、間口4.5間×奥行３間という大きさに加え、窓は前面に２つ、側面に１つ配している。また窓の様式は従前の和風様式とともに、ゴシック建築を思わせるオーダー柱などの洋風の様式が取り入れられ、１つの蔵に和風、洋風の窓が併存している。また、戦後の徳次郎石蔵の正面入り口や窓を見ると、手の込んだ豪華な装飾、彫刻が目を引く。

## ８．結びに

徳次郎石を用いた石蔵の歴史は、江戸時代後期から昭和時代まで、130年余を数える。この間集落の人々が自ら採石･加工し、建物を建築し、これを利用してきた。いわば地域の資源を活用し、地場産業として発展を遂げ、暮らしを支えてきたのである。今日、建築された石蔵は、農村風景にマッチし、独特の景観を醸し出しているが、築後100年を超えた今日、老朽化が進み、生活様式の変化に伴って、残念ながら石蔵は利用価値を失いつつある。しかし、先人が築いてきた石蔵の変遷をたどりながら、先人の残した石蔵をもう一度見直し、新たな光りを当てて再生することが求められる。

写真７．徳次郎石の張り石蔵（店蔵）

写真８．徳次郎石を使った窓の彫刻

## 主要文献

中村幸蔵「石造構法に関する研究」1987

宇都宮市立富屋公民館「明日に伝えたい富屋の郷土誌」1997